

## 鶴川図書館大好き！の会第2回ワークショップ（第2グループの記録）

手嶋 孝典

### 次はどうするか

守谷：菌田さんが図書館側に何を考えているかを出させなくてはと言っている。私もそう思うが、図書館長、副館長は、具体的なプランを持っていないのではないかな？

最初は廃止と言ってきたが、市民がゴタゴタ言うので、何となく市民協働のような新しく味付けしたものができればそれでもいいか、どんな案を出してくるか、喋らせておこう、という感じなのではないか。だとすると、菌田さんが言うようにちゃんとプランや予算を出せと言ってもイメージがないから出せない。逆にこちらから出すしかないのでは？

T：そう思う。

守谷：八王子方式というのは、図書館を増やしているが、元々の市立図書館（南大沢図書館など）を会計年度任用職員にやらせている。元々いた図書館の常勤職員（司書）は、庶務をやらせている。図書館の運営は、一部管理職、館長などは別だが、現場で選書したり、レファレンスをしたりなどの図書館業務は、全部基本的に会計年度任用職員に任せているという方向。常勤職員は図書館のことを分かっている限られた職員を庶務に置くとか、そういう人たちは、いろいろな指示はするかもしれないし、図書館全体の方向は出すのかもしれないが、図書館のサービスをどのようにするかは、全部会計年度任用職員に任せる、ということを確認に言っていた。だから、古くからいる常勤職員の司書有資格の人たちからは、私たちのことをどうしてくれるのかという声もある、と言っていた。それが八王子市の大きな方向だ。町田もそれしかないと思う。

T：町田もその方向でいっていると思うが、図書館として明確に展望が描けている訳ではない。ただし、鶴川駅前図書館の指定管理が成功するかどうかが大きな影響を与えるのは間違いないと思う。

守谷：それをもっと徹底して、館長は専門職でないと困ると思うが、問題は会計年度任用職員の給与水準が低いこと。そのような人たちにすべてやらせるのはどうなのか？という問題は組合的観点からはあるが、今のようなやり方、常勤職員と会計年度任用職員の仕事を分けて、常勤職員はカウンターに出ないで指図だけしてということは、お互いにやりやすい。サービスは全部、会計年度任用職員がやってねと任せた方が、受ける方だってやりやすいと思う。そうすると、常勤職員は3倍くらい給料をもらっているから、経費が減る。鶴川だって、1500万円位減る。あくまで直営である。

T：会計年度任用職員制度は、昨年度から始まって、常勤職員と会計年度任用職員の役割分担を明確に定められている。鶴川図書館の場合は、(人数が少ないため)常勤職員もカウンターに出ているが、基本的には常勤職員、特に係長クラスについては、カウンターに出さないことが原則になっている。ただ、今も鶴川図書館の全体のマネジメントや対市民サービスの重要な点については、指示したり、指摘したりはするが、日常的な図書館の運営については、司書の中でも取りまとめとなる専門員という職種の人を中心に基本的には任せている。

守谷：本当は全部常勤職員でやるべきだと思うが、今の世の中夢物語。図書館の仕事を常勤職員と会計年度任用職員の仕事を分けるというのは、現実的でない。カウンターに出ない人たちに選書ができるのか、ということがある。

T：常勤職員は、中央図書館以外は選書に関わっていない。

守谷：会計年度任用職員が選書をやっているの？常勤職員はレファレンスはやっているの？

T：基本的に図書館実務とマネジメント、管理の部分を大きく二つに分けている。

守谷：もっと常勤職員の人数を絞り込むことは可能か？

T：やり方等、工夫次第だと思う。不可能ではない。

手嶋：それには反対。なぜなら、会計年度任用職員に図書館の実務を全て任せてしまう、ということであればいいが、逆に常勤職員が何の蓄積も持たないことになる。

守谷：常勤職員は蓄積を持たなくてはいけない。ただ、今だって同じで、それが十分にできているのかという問題である。今司書として中心となっている限られた常勤職員は、これまで長くカウンターでサービスをしてきた経験があるからできるので、彼らがいつまで図書館にいられるのか、全く保証はないのではないかな。

手嶋：例えばカウンターに出ないとか、選書もしないなど、そういう人が常勤職員だとしたら、図書館のマネジメントができる訳がない。

守谷：今も全くそうだ。

手嶋：今は例えば、海老澤係長、高松担当係長、野口担当係長たちは、マネジメントができる経験を蓄積しているからそれができるのであって、人が変わっていけば、(カウンターの経験を積んでいない人に)それができる訳がない。

守谷：彼ら彼女らのような常勤職員を館長や係長に据えればいい。

手嶋：管理職だけで運営ができる訳ではない。

守谷：だけど、常勤職員で力のある人をどういう名称でもコアとして置くのはいいいが、少なくとももっとそれを絞り込んでいくということ。

T：委託業務を考えた時に、それを正しく評価できないということがある。委託が本当に正しく行われているか、こちらの狙いどおりに処理されているのかどうか、評価できる人がいなくなってしまうという意味では、今回も似たような問題があって、常勤職員の中に図書館実務に精通する人を一定数確保することが必要なことだとは思う。

手嶋：そのとおりだと思う。そのためにはカウンターに出たり、選書もしなければいけない。そのことが前提で、そうしなければ、職員を養成できる訳がない。今いる係長級の人はずっといられるのであればそれは可能かもしれないが、人事はどんどん変わっていく。

守谷：でも、今の状況とか、今後の在り方を考えたら、手嶋さんが言うような可能性はゼロに近い。今の予算を縮小して、なおかつ直営でやるとしたら、それ位のことを考えなければ。「図書館のノウハウの蓄積」などというが、結構抽象的だ。

手嶋：それを言ったらおしまいだ。

守谷：会計年度任用職員がちゃんといれば、そこに蓄積される。それも首切り(雇い止め)がない、八王子のようにすることが前提。今や常勤職員に蓄積などと考えない。常勤職員だって異動するのだから、蓄積なんてありえない。

手嶋：それだったら、常勤職員は要らない。

守谷：今のような位置付けなら常勤職員は要らない。それを私は言っている。はっきり言って要らない。直営である以上、館長などは常勤職員である必要はあるかもしれないが、それも本当の意味で図書館を理解している人でなければ意味がない。

手嶋：それならそれで、徹底すればいいが、中途半端だと逆に困る。

守谷：申し訳ないけど、常勤職員のような高い給料の人は退場して貰って、会計年度任用職員に頑張ってもらって、意欲を持ってやってもらおう。それ以外にない。

手嶋：会計年度任用職員の処遇改善は必要。

守谷：それはそうだ。欠員ができた時に新しく採用する会計年度任用職員は、会計年度任用職員が選ぶ。図書館の仕事を知らない人たち（常勤職員）に選べる訳がない。

手嶋：そういうことも含め、だから常勤職員にマネジメントなどできないということになる。

守谷：もう常勤職員ということに幻想を持たない。その位の対案を出して、総額の運営費がこんなに違うのだからそれでやらせろと言う。会計年度任用職員も私たちだけでやらせて貰った方が有り難い、という声がある。

手嶋：実際に荒川区がそうなっている。常勤は各館に一人位しかいない。会計年度任用職員で回している。実際にその方がちゃんと回る。

守谷：それを言っている。その方がいい。そういう案を出して行って、そこに市民がいろいろな形で関わればいい。

清水：会計年度任用職員だけでやるけど、常勤職員が何人か、少人数必要だというときに、その人たちが専門職として採用される可能性、そういうことは無理なのか？

守谷：それは条件次第だと思う。交渉次第。

清水：それを条件に、やはり専門職、確実にそういう方が常勤でいてくれる方がいいような気がする。どうなのでしょう？

手嶋：もちろんそう思うが、その時に常勤職員がどこまでマネジメント能力を発揮できるかだが、有資格者として採用するのはいいが、その人たちは司書としての養成が必要。それをどこでやるかが問題。さっきの話に戻ってしまったが。

守谷：それは交渉次第だが、カウンターなどの図書館業務をやらないのだから、何のために常勤職員がいるのかという感じ。荒川の場合はどうか？

手嶋：係長級が一人残っている？。

守谷：それは司書でも何でもなくて、入れ替わるの？

手嶋：そこまでは分からないが、専門職でずっと残っているというのではないと思う。

守谷：我々は図書館に長くいて苦労したが、変わった人が係長で来ないようにして貰う。変な人が来たら、その人が異動するまで頭を低くして待ってはいけない、そのような人が一杯いた。藪田さんが言われるように、相手から引き出すといっても、多分、そのようなものは持っていない気がするから、率直に言ったほうがいいと思った。

清水：清原さんとこの前話していて、それが市の考え方だという言い方をすごくされていたが、今、守谷さんが仰っていたことと清原さんが言っていたこととは全然違っている。市はそれしか考えていないみたいなことまで仰っていたから、そこだけは確認させてもら

った方がいいのかなという気がする。市民団体を作って、NPO か何かにして指定管理者にするのだと市がそのように思っているのだと断言されていた。それと、直営の可能性ははっきり言ってないのだという言い方をされていた。

守谷：その辺は確かめてみる必要があるかも。清原さんはそのように言っていたけど、本当なのかって。

### 鶴川図書館応援まつり

手嶋：今までやってきたことは、古本市もそうだが、非常に大事なことだと思う。市民協働と言った場合、図書館の運営に直接携わるというのは私は難しいと思っているので、例えば、おはなし会もそうだが、応援まつりのような形で関わるのが、市民協働だと思っている。市民協働として位置付けるのであれば、図書館運営に関わるのは無理だと思っている。

守谷：秋の応援まつりというのは、「大好きな会」や「すすめる会」がやるにしても、メニューは藺田さんが持ってくるレクリエーションとか、庄司さんたちの色んな絵を描いたりだとか、それ以外にメニューは知恵を絞るといろいろなことがあるか。古本市等あるが、毎年同じことをやるのだって、意味がないことはないけど。

手嶋：でも、結構好評な催しというのはある。古本市が代表だと思うが。

清水：さっき（全体会のこと）、高橋さんが最期にボランティアで中・高生を参加させてくれないかという話があったが、参加してくれそうな人たちが、どんなことをやりたいか聞くのも、これをやるからこれをお願いしますではなくて、「どんなことをやりたい？」と聞いて広げていくのもいいのかなと思う。

守谷：自分たちが何をやりたいか、ということだね。Tさんは去年の応援まつりは見ていないと思うが、鶴川図書館としてこんなことをやってもらったらいいなというのは何かないか。

T：図書館に親しんでもらう取っ掛かりが、イベントの中で作れないかと思っている。もちろん図書館を長く使っているユーザーの方は大事だが、今まで本から遠ざかっている人、あるいは図書館に行く習慣がなかった人も、コロナ禍で地域の中で、家から近いところでのどのように過ごすか、大きく問われていて、その中の選択肢の一つとして、図書館の魅力というものをズームアップできればと思っている。UR 都市機構のコミュニティビルダーの方との連携できるのか？

守谷：6月27日（日）の「だんちでえほん～鶴川団地で絵本よみきかせ～」を見てみる必要があるかも。古本市は、自分たちで集めた本を売っているが、鶴川図書館の入り口のところに再利用本（リサイクル本）が置いてある。それを私たちに回して貰って売るとするのは支障があるだろうが、リサイクル本を他の館からも集めておいてもらって、古本市の協でリサイクル本を自由にお持ちください、リサイクル本の配布を私たちがやるというのはどうなのか？

T：検討していないので分からないが、リサイクル本は、ご自由にお持ちくださいということだが、図書館の活動の一環。

守谷：せっかくの応援まつりだから、図書館もそれに協力して、リサイクル本を捌くのは

私たちがやる。それは館長に申し入れれば可能かもしれない。それを売って現金にしたらまずいが。

手嶋：昔、中央図書館が地元の商店会とタイアップしてやったことがある。図書館が直接は売れないが、図書館から一度市民に払い下げるといふか、商店会に渡したものを商店会がお金を取って（売るということではなく、カンパという形）、それをチャリティ古本まつりにしたという実績があるので、できないことではないと思う。今議論してもしょうがないと思うが、無料で配るといふのは、いくらリサイクル本でもマズイと思っている。図書館として市民からお金を取っていいと思う。欲しい人に。

守谷：他の自治体でもやっているところはあるのだろうか。

手嶋：市の図書館の財産なのだから、図書館で処分するのは、直接市民に売らなくても、古本屋に売るとか、いろいろな形で収入できるはず。

庄司：その収入はどこに行くのか？

手嶋：図書館が売れば、図書館の収入（歳入）になる。

守谷：雑収入になって、市の全体の歳入予算になる。

手嶋：弁償金と同じように特定財源として、図書館の予算になるはず。

守谷：図書館の予算にはならない。

庄司：それを図書館の新しい本を買ってもらえる資金にできればいいが。

守谷：それは工夫すれば、できないことはないが。今職員は忙しいし、そんなことまでやられていけないというのが多いのではないか。それは分からないけど。

清水：さっき T さんが仰っていた図書館に入ってもらおうということ言えば、図書館クイズを子ども用にやっていたと思うが、大人にもこんな本があるんだということに気が付いてもらうために、大人の人が図書館に足を踏み入れて貰えるようなゲームやクイズなどがあってもいいのかなと思う。こんな雑誌だって、こんな新聞だってあるのだということをご存知ない方も結構いらっしゃると思う。図書館からもこんな本を利用して貰いたいという観点でクイズなどで協力してもらったらいいかなと思う。

T：図書館の中で子ども向けだけでなく、一般の方向けのいろいろな本の紹介の館内企画などやっているが、それ以外に地域の一般の方たちに、図書館に足を向けて貰えるように図書館にこんな蔵書があるよとか、こんなことができるよなど、積極的な働き掛けをした方がいいということか。

清水：おまつりの時に子ども用の企画が多かった。結構大人の方も来てくださるので、図書館クイズ大人版のようなものがあっていいのではないかと思い、話をしてみた。

守谷：鶴川の蔵書だけではなかなか難しいかもしれないね。

清水：でも、それこそお料理の本だとか、そのようなものだっていいと思う。

T：料理の本は、よく借りられる。

清水：あとは、商店街と関係があるような読み物があつたら、そういうのを探してみてくださいというの、いいのかなと思う。お酒の品揃えが良い店や馬具のお店もあるのか？

守谷：乗馬のね。

## 書庫の活用

庄司：書庫の活用について、地域のボランティアが何かできるのではないかということにすごく戸惑いがある。あそこは通気が悪いし、暗い。おはなし会で使わせて頂いているが、短時間なので我慢できる。あそこでゆったり本を読む場所になるかということ、かなり難しいなと思う。また、地域の人ボランティアは、やはり有償でなくてはいけないと思う。

### **障害者サービス**

守谷：障害者サービスを地域館でやっているのは、鶴川駅前図書館だけ。それもごく僅か。障害者サービスこそ地域館でちゃんと取り組めば、身近な障害者の方が利用できるのではないか。

手嶋：やはり、地域の図書館が取り組まないとね。

T：鶴川図書館は、通路が狭い。

守谷：対面朗読など。宅配サービスは、中央図書館が全部仕切っている。